

■ 続いて、同じく学院卒業後3年間、学院スタッフとして働いてくださった、「高木純一&こずえ夫妻」の証をお読みください。

卒業生ミニストーリー・レポート！

ハレレヤ！ 主の御名を賛美します。25期生の高木純一です。
■ 学院卒業後、神様の恵みで3年間学院スタッフとして従事させていただきましたが、このたび神様に次のステップを示され、故郷宮崎に遣わされることになりました。今回はこのような形で証させていただく機会を与えられ感謝しています。私たちの働きを知っていただき、祈り支えていただけたらと心から願っています。私たちのビジョンは、今世界中、そして日本中で建て上げられている祈りの家を、エルサレムから見て最も東の果ての地、宮崎で建て上げることです。

■ 2013年の9月頃、神様からはっきりと「神の国とその義をまず第一に求めなさい。そうすれば、それに加えて、これらのものはすべて与えられます。」続けて、「わたしのために生きなさい。」と語られました。正直な私の感想としては、「えっ？神様、私既に献身していますよね？」という感じでした。しかし神様は「わたしのために生きなさい」ともう一度語られました。その時、自分のやりたいこと、願っていることに献身していたことに気づかされました。いつのまにか神様への献身というより自分の働きに献身していたと教えられ、「神様にもう一度人生を捧げます」と祈り、私たち夫婦に願われている働きを求め日々が続きました。その時から不思議とイスラエルについて眼が開かれていき、ローマ9章～11章や、マタイ23章のみことばが心に留まりました。それは私たち異邦人に福音が届くためにイスラエルが折られ、私たちが彼らに与えられた祝福を共に受け継ぐ共同相続人になったこと、そのために今は彼らの目が覆われているが、イスラエルが回復していく時に、異邦人の完成も進み、やがて彼らが主の御名によって来られる方に祝福あるようにと叫ぶ時に再びイエス様が王として来られるということが、私の心にリアルに迫ってくるのです。そして、今私たちが生きている時代が本当に主の再臨の近い時代であるということを知り、何よりも主の道を備える働きに人生を捧げたいと強く祈りました。使徒15章16節～18節には、『この後、わたしは帰って来て、倒れたダビデの幕屋を建て直す。すなわち、廢墟と化した幕屋を建て直し、それを元どおりにする。それは、残った人々、すなわち、わたしの名で呼ばれる異邦人がみな、主を求めようになるためである。大昔からこれらのことを知らせておられる主が、こう言われる。』とあります。イスラエルの回復と異邦人の完成がイエス様の再臨の為に必要ですが、神様はその働きを達成する為にまず、ダビデの幕屋を回復すると言われているのです。しかもヤコブは当時の教会を指してこのことを語り、イスラエルと異邦人が一つとされていくこと、また教会が、神の宮に住まうことを切に望んだダビデのような心を持った者たちによって祈りと礼拝が捧げられるところとなると言うのです。イエス様ご自身が教会に対して「わたしの家は祈りの家でなければならない」と語られた通りです。これを通して神様の計画（宣教）は進んでいくということを知り、私たち夫婦は「神様、この働きに献身します。イエス様のゴールを達成するために人生を捧げます。」と祈りました。さらに具体的にダビデの幕屋とは、祈りの家とはどのようなものか学びたいと願っていたところ、IJCCの金聖主牧師から祈りの家セミナーがあると聞き、そのセミナーを学ぶにつれてますますこの働きに対する情熱が湧いていきました。

■ 2014年の元旦に夫婦で、「ITOD 石狩ダビデの幕屋（祈りの家）」で、祈っている中で、詩篇24篇7節。「門よ。おまえたのかしらを上げよ。永遠の戸よ。上がれ。栄光の王が入って来られる。」この御言葉が力強く迫ってき、「主が来られる道備えをしなさい。」と語られました。またその二週間後には、神様の恵みにより夫婦でイスラ

エルに行くことができ、主が再び来られる時に開かれる黄金門や、いまだにメシアを待ち望んでいるユダヤ人を見てエゼキエル43章2節が鮮明になり、主が来られるためになされなければいけない、開かれなければいけない未伝道部族の門が開かれるように、イスラエルの民が神に立ち返るように、東の果てで愛するイエス様の再び来られる道備えを、祈りと礼拝をもってとりなすべきであると思われたのです。その後、3か月間夫婦で、韓国祈りの家（KHOP）で国際祈りの家（IHOPKC）で教えられている学びを受けることができました。しかし霊は燃えていたのですが、現実的な状況を見る時に恐れがあり、いつ北海道から宮崎に移動するのを悩んでいました。妻が妊娠しているというのに宮崎に行ったら仕事もない家もない、やっぱり北海道で働いているのが御心じゃないかという思いが来て、悩んでいました。しかし、決してぶれない妻の信仰と、8月に北海道であった祈り会で励ましとチャレンジを受け、やっぱりこれ以上神様を待たせてはいけない、神様の御言葉が与えられているのだったら信じて踏み出そうと決断しました。決断した次の日には不思議なことにノンクリスチャンの方からこの働きの為に献金があり、神様の励ましに感動しました。さらにCFNJオーディエーションチームからこの働きの為に按手までして送り出さいただき、本当にこの働きは神様から出た働きだと強く確信する事が出来ました。

■ 2014年11月に、家も決まっていなかった状態で私たちは宮崎に移り、同じビジョンが与えられている実姉や、教会の兄弟姉妹と共に宮崎ハーベストチャーチで祈り始めました。ところが、以前から宮崎ハーベストチャーチのリーダーが枝分かれした教会をこの地にと願う祈り、私たちもいつかは祈りの中で、そこに出て行きたいと願っている場所に、イスラムの礼拝所が先に建てられたことがわかり、この霊的戦いは祈りと礼拝によってしか勝利できないと実感しています。イスラムの留学生にも福音が届けられ、彼らが祖国に帰って神の働き人になるようにと祈り続けています。祈りと宣教が一つとなって進むように是非覚えてお祈りください。

■ 現在、感謝なことに子ども誕生し、住まい、家具、引っ越し費用なども与えられ、神様の言葉を信じて献身する時に、全てのものが備えられるということの恵みを体験しています。私たちに最近与えられた子どもの名前は、「主真（しゅうま）」です。「主の道を用意し、主の通られる道をまっすぐにせよ。」から名付けました。子どもの名前を呼ぶたびに、私たちは荒野で叫んだバプテスマのヨハネのように、私たちも主の道を備えるためにとりなし続ける祈りの家として立ち続け、何よりも神の言葉以上に人本主義が掲げられる時代において、唯一の救い主イエス様の御名を高く掲げ続けようとして願っています。それぞれに与えられている働きやビジョンは違いますが、同じキリストのからだとして、皆さんと共に神の国に仕えていけることは喜びです。イエス様が来られるその時まで共に走り続けましょう！ また、この働きは皆様の祈りとサポートが必要です。引き続き祈り手と経済が満たされ続けるようお祈りください。ご支援のお心が与えられた方は下記の口座をお願いします。心より感謝します。

2015年1月 高木純一（25期生）、こずえ（27期生）

E-mail miyazakitod@gmail.com Web http://miyazakitod.wix.com/mtod

ゆうちょ（郵便振替）口座番号 01740-8-128302 口座名義 MTOD（エムトッド）

(2)



■ 卒業後結婚され、上尾キリスト教会の牧師として開拓伝道に携わってこられた「山田勝利&れん夫妻」に、「蒔喜ちゃん」が誕生しました。すでにご存知の方が多いと思いますが、蒔喜ちゃんは、早産で、超未熟児（生まれたときの体重は、493g）として生まれ、その後も長い入院生活を送り、この1月31日、ようやくご両親の元に戻ってきました。今は体重が4キロにも成長されたとか…れんちゃんからの驚くべき奇跡の証です。お読みください。

主の聖名をほめたたえます。

■ 私たち家族に新しく加えられた、娘・「蒔喜（まき）」の誕生について、主の素晴らしさを証するとともに、皆さんにご報告できることを嬉しく思っています。名前由来は、イエスさまの喜びの種を蒔く者になってほしい、詩篇126篇5節「涙とともに種を蒔く者は、喜び叫びながら刈り取る。」とあるように、どんな時にも種を蒔き続け、やがてたくさんの収穫の喜びを体験してほしいと願い、出産の2週間前には、はやばやと決めていました。今考えるとそれも主の備えであったと思います。今年の9月12日に、「蒔喜（まき）」は生まれました。まだ妊娠23週（6ヶ月と3週）であったため、体重は493g（すぐに処置したため身長は未測定でしたが、おおよそ29センチほど）でした。

■ 出産は突然の事で本当に驚きましたが、小さいのちの存在は私たち夫婦に大きな喜びと感謝を運んでくれました。妊娠の初期にトラブルがあり、2ヶ月近く自宅で安静に過ごした期間はあったものの、お腹の中の赤ちゃんは順調に成長し経過は良好、安定期に入りほとんど普段通りに生活していました。しかし出産の前日の夜に少しお腹に違和感を感じ始め、日付が変わるとそれが陣痛に変わりました。すぐに主人とかかりつけの病院へ車で向かいましたが、その時すでに陣痛は3分間隔になっていました。当直の先生に診てもらおうと、切迫早産で非常に危険な状態ということでした。

当直医師が説明してくれたことは、

- ・『すぐに赤ちゃんを帝王切開で取り出す必要がある。』
- ・『23週では早すぎるため当院では治療できない。』
- ・『今取り出したとしても、恐らく生き延びることはできないし、生き延びたとしても赤ちゃんに100%後遺症が出る。』
- ・『受け入れがたいとは思いますが、流産と考えてあきらめた方がよい。』
- ・『たまに超未熟児で助かり元気に育つ話を聞くかもしれないが、それはとても珍しいケースであり、23週ではほばないと言える。』
- ・『それでも助けたいなら今から受け入れてもらえる未熟児の高度な医療の病院を探すが、恐らく受け入れてはもらえないので、あきらめてください。』
- ・以上を踏まえ、『夫婦で考えてすぐにどうするか決めてください』という厳しいものでした。先生の説明を情報としては聞きましたが、何を言っているのか全く分かりませんでした。その間もお腹の中で蒔喜はずっと元気に動いていました。そんな中で私たち夫婦が話し合ったことは、
- ・神さまが私たちに委ねてくださったいのちに対して、最善のことをしたい。
- ・1日でも長くお腹に留めておき、いつ出てきても対応できる環境の病院へ転院したい。
- ・どんな子であっても主が私たち夫婦に委ねてくださったから、受け入れて愛していきたい、ということでした。投薬でなんとか陣痛を止めてもらっている間に、担当医が到着し一生懸命受け入れ先を午前中いっぱいかかって探してくださいました。不思議だったのは、この切迫した状況の中で、頭は混乱していたものの、心には超自然的な主からの平安に、夫婦共々満たされていた事でした。主を信じる者はなんと幸いだらうと話し合いながら、奇跡の神、復活の主、いのちを治めておられるお方に信頼し祈っていました。



いのちってすごい！



■ 県内の2つの病院には断られ、たった1件だけ都内の大学病院が『ベッド代は高いがそれでもいいなら受け入れる』と言ってくださいました。すぐに救急車で搬送され、1時間半で病院に到着しましたが、救急車の中で再び陣痛が始まってしまいました。幸いにも破水や出血はなく、病院到着後はすぐに医師の診察と緊急手術になった時のための様々な検査を行いました。経過を見ている間にも陣痛は進んでいき、赤ちゃんが下がり始め、結局すぐに緊急帝王切開をする事になり、あっという間に赤ちゃんは取り出されました。取り出した時は呼吸が弱まり仮死状態でしたがすぐ蘇生し、保育器に入れられ、たくさんの管をつながれ、NICUに入りました。出産の翌日、初めて蒔喜に会いました。小さな蒔喜を見て最初に思ったのは「いのちってすごい！」ということです。蒔喜はまだまぶたも開いていない、全身の皮膚も完全に出来上がってなくて血管が透けて見えるような、まっかっかな文字通りの「赤ちゃん」でした。でも細い指がちゃんと5本あって、指の先には本当に小さな小さな爪があって、背中を大きく上下させて力いっぱい息を吐いていました。蒔喜の小さな身体の中に、ちゃんといのちが入っていました。本当に、たまたま生まれた人なんて一人もいなくて、みんな奇跡を経て生まれてきて、奇跡的に生きてるんだと思いました。妊娠も出産も、全然当たり前のことではなくて全部奇跡なんだ、と。「いのち」を治めている神さまが一人ひとりを目的を持ってこの世に送り出して、生かしているんだということが分かりました。神さまの愛を、すごく大きな愛を感じました。蒔喜は入院中、大きな手術を受け、大人だったら失神してしまうほどの治療にも何度も耐えてくれました。「もはやこれまでか…」と思う場面も多々あり、私たち夫婦は胸が締め付けられるような思いをしましたが、その度に主の守りがあり、最善に導かれました。2ヶ月半くらいしてNICUを出ることが出来、1月31日に4ヶ月半で退院することが出来ました。最近知ったことですが、この数週間の赤ちゃんを助ける医療は、日本だからこそできることだそうです。医療費も国からの援助によりほとんどカバーしてもらえました。そしてこの数年間に開発された人工呼吸機や薬などが、蒔喜にとっては大きなカギでした。最新の設備が整えられた病院が備えられていたこと、蒔喜のいのちが続いて成長できている事など、私の力ではコントロールできない、様々な主のわざを見えています。一つひとつ山を乗り越えることが出来たことに、医師たちは「蒔喜ちゃんの生命力ですよ。」と表現されましたが、それは確実に主の守りでした。これほどまでに生きている主を、そしてその愛を体験した日々はありません。

■ 多くの方々のお祈りに支えられ、現在、蒔喜は生後6ヶ月（修正2ヶ月）が過ぎ、体重も4キロほどになりました。最近では良く笑ったり、「あ〜」「う〜」というような喃語もできるようになりました。入院中、一時は肺が非常に悪くなってしまったため、退院時には酸素ボンベを持ち帰るようになっていりましたが、実際には肺が良くなり、酸素ボンベは必要ありませんでした。数年間は通院して経過を診ていく必要があることと、栄養剤のような薬を飲んでいるものの、今のところ重篤な後遺症はなく、順調に成長しています。これからももしかしたら成長過程で色々な事が出てくるのかは分かりませんが、変わらない主の愛の御手が絶えず差し伸ばされている事を覚えて前進していきたいと思えます。

尊い主の御名を崇めつつ 山田れん

(3)